三歳未満児の探索活動

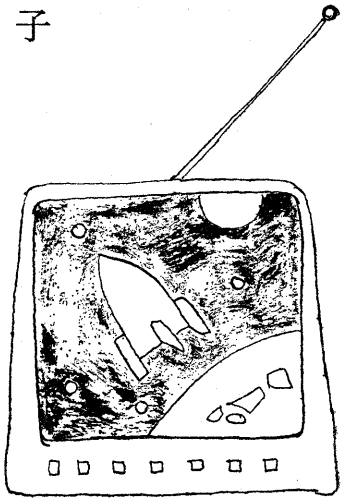
——穴への関心——

今井和子

はじめに

自分が獲得してきた歩行という機能をフルに使って、自らの意志で動きまわれるようになってきた子ども達の喜びよう——新鮮な驚きと好奇心溢れた表情で、あらゆる感覚を駆使して周囲を探り始めます。その探索心こそ、子ども自らの活動（あそび）の起爆剤である事。又、子ども達が常に、自ら、周囲の物事に触れ興味ある活動をしていく、いわゆる探索活動を十分に楽しませることが、三歳未満児の自発性を伸ばす保育の〝鍵〟ではないかと考え、保育室の環境構成に特に配慮しながら、十数年探索活動を重点においた実践を展開してきました。

その結果、転勤した四箇所のどの保育所に於ても、三歳未満児が「穴」に強い関心をもっていることを知りました。その行為を分析しながら子ども達の好奇心や興味を一層広げていけるような遊具づくりを試み、何故子ども達がこれ程「穴」にひきつけられるのかを私なりに追



求してみました。

研究の方法

(1)子どもの好奇心や探索心にもとづく「いたずら」を観察し、保育の手がかりにする。

(2)おやつ、食事、午睡以外の時は、子ども達の自由活動を中心にした保育形態とし、探索が十分楽しめる環境づくり（特に保育室を家庭に近い状況にし、生活用具、家具など設置し野菜、季節の自然物など置く）に留意し、そこで子ども達の行為を観察し分析していく。

(3)戸外での探索も十分に楽しませる。

(4)園の方針として三歳未満児の各保育室をオープンにしどこでもあそべるようにする。

経　過

まず穴に対する子どもの様々な行為を分類しA～Fまでの6項目にまとめてみました。そして、それぞれは穴への行為の観察を試み、子どもの穴への反応をヒントに保育者が創った遊具・活用した教材などをまとめてみました。（表1）

今回は、A～Fの中でも一番多く見られたB、穴に物を入れる、落とす等の活動を中心に、子ども達の活動の経過を追ってその考察を試みてみました。

◇「保育者がつくった環境、遊具」を中心にした活動の展開（表1のB）

室内でも戸外でも穴をめざとく見つけてはそこに入るものを探してきて何かしらやっている子ども達、始めは、「穴に物を入れたり落としたりする行為」それ自体が楽しいのだろうと思い㋑～㋭の遊具をつくってみました。

◇経験の繰り返しから予想ができてくる

次に、一～二歳児の保育室に㋭いたずら屏風を作って大、小様々な穴をあけておいた所、殆んどの子が、その

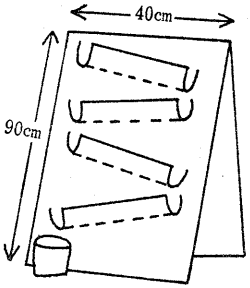
表1　穴に対する子どもの行為とそれから発展した遊び(遊具)

	子どもの穴への反応<1例>	月年齢	穴への行為の考察	子どもの反応をヒントに保育者が作った環境、遊具
A	のぞく 排水管や下水管など暗くて見えない所、塀の穴など	10か月 〜 3　歳	・のぞいて意外な視界に驚く ・のぞいたあと手や指をつっこみ〝変ダナ〟〝何カナ〟とさぐる	段ボール箱を重ねてつくったトンネル いたずら屏風(屏風の一箇所に窓やのぞき穴をつくる) 色の変化を楽しむ望遠鏡、万華鏡
B	**穴に物を落とす** **(つめ込む、入れる、はめ込む)** **人の鼻の穴や口に指をつっこむ** **床の節穴にごみをつめる** **ごみ箱にいろんな物を入れる** **下水管のふたの穴に砂な石をおとす** **木のうろに石や葉をつめこむ**	**6〜7か月** **10か月〜2歳** **1　歳** **1歳〜3歳** **1歳半〜3歳**	**・見えない穴の中を探ってみようと、物を探してくる** **・穴の大きさと入れた物の大きさの弁別をする** **・穴の深さ、を探る** **(音の反応、棒の長さから)** **・穴をふさぐ**	**㋑ミルク缶のクルミおとし(音の反応)** **㋺透明ポリ容器のクルミおとし(棒、牛乳キャップ)** **㋩水の中に物が沈んでいく経過をみれる透明の大きなポリ容器** **㋥坂をころがっていく様子を楽しめる(ころがし板)** **㋭いたずら屏風(大、小の穴をあけておく)** **㋬形の異なる積木おとし　㋣パズル** **㋠「どこから出てくるかな?」出口のわかりにくい遊具** **㋡体育遊具、カバのボールころがし**
C	穴から物を引き出す ぬいぐるみ人形のほころびからスポンジや綿をひきぬく ジュースの空缶に入れた砂をふり出す ティシュペーパーを取り出してしまう	8か月 〜 1歳半	・つまんで引き出す行為そのものの面白さ ・何がどれ位入っているのか、全部取り出してみようとする(量)	探索箱(袋)をつくってメージャー、懐中電燈、果物、野菜などふれさせたい様々な物を入れておく 空箱利用の探しっこ、おみやげごっこ 磁石をつかった宝箱 しゃもじの引き抜き遊び
D	穴に物を通す マカロニに箸を通す 花はじきの穴に割箸を通す	2　歳 1歳半〜2歳	・穴と通す物の長さ、大きさの弁別 ・長い穴の出口を見出す ・穴に物をつきさす行為の面白さ	リンクの棒さし ざるを利用してつくった穴さし ひも通し、釣り糸通し(穴のあいた玉や珠ず玉)
E	穴をつくる 蟻の穴をほじくり大きくする 小麦粉粘土に指で穴をつくる 砂場で穴を掘る	1〜2歳 1〜3歳 1〜3歳	・いろんな物を扱いながら偶然できた穴に興味を示し、どうしたら穴が出来るか、という試みに発展していくことが多い	・ハンガーボードに半紙を貼り穴をあけていくあそび ・発泡スチロールで遊ぶ(ちぎったり、わったり、棒を打ち込んでひきぬく) ・砂場での様々な穴つくり遊び 例　ホースから流れ出る水でできる穴 いろんな物を埋めて取り出し見出す穴
F	穴(狭い所)に入りたがる ロッカーの中、溝の中、ベットや机の下にもぐる	7か月 〜 3　歳	・自分だけの世界をつくり安定する ・空間の大きさを体で探る 〝入レルノカナ?〟	・押入れの戸をはずしカーテンをつけて出入りして遊ぶ ・段ボール箱で家、のりもの、ほら穴山をつくる ・タイヤを重ねた穴

「穴」を活用した遊具（落とす、入れる）遊び

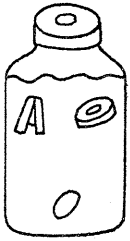
表１－Ｂの試作図

㋺ころころ板



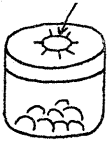
クルミがころがっていくのをみて楽しむ。

㋩水の中におとす



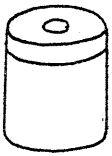
物によって落ち方がちがうこと(変化)をたのしむ。

㋥透明ポリ容器



指先に力を入れないと落ちないので㋑より難かしい。透明容器なので、おとしたクルミがたまっていくのをみてたのしむ。

㋑ミルク缶



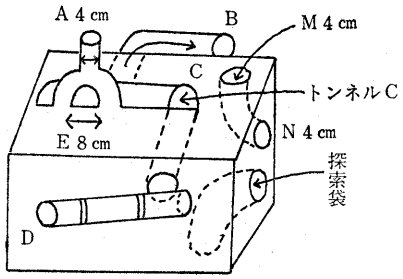
クルミを穴からおとす、コロッと落ちる音を楽しんでいた。

穴の大きさ・形に近い物を探してきて入れている事がわかりました。例えばクルミ等は比較的小さめの丸い穴に、隣りの大きな四角い窓からは、小物をおとすことはめったになく、自分の頭をつっこんだり、人形をくぐらせたりしていました。いろんな穴にいろんな物を落とす。（入れる）過去の経験の繰り返しから、〃この穴にはこれ位の物が入る筈〃といった予想が子ども達の内にできてくることを知りました。自分がいろんな所から探してきた物が、この穴ならきっと入る筈だと考えると、こんどはその一つ一つを確かめなければ気がすみません。そこで、次々、屏風につくられた穴に、物を入れてみる――即ち、穴にむかう子ども達の行為が室内に（身近に）穴をつくったことでより一層活発になってきたことを感じました。

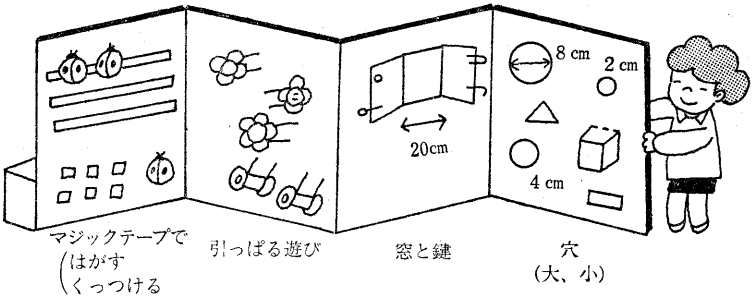
◇見えなくなった物を探ろうとする行為

もう一つ、大変に面白かった発見は、屏風の片側の穴からクルミを入れた子が、トコトコと反対側にまわって

㋩どこから出てくるかな？



㋥いたずら屏風

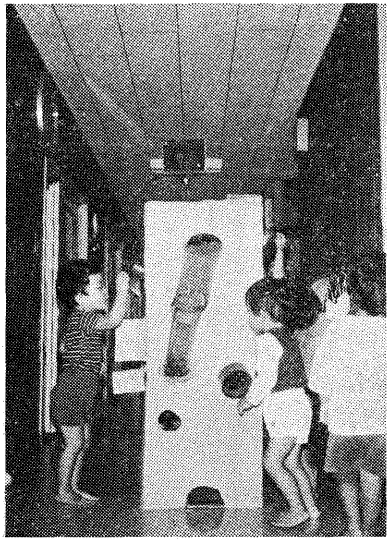


今、自分のおとしたクルミがどうなったか？を確かめにいった事。そして自分の落としたクルミを見つけると、〃アッタ！〃と喜んで又元の位置に戻り、一つのクルミであそび続けた事でした。ところが、中には、クルミ等、穴に入りそうな物を次々探してきては入れ……落とす物がなくなると、〃オシマイ〃といわんばかりに他のあそびに移っていく子もいました。

この二人の行為を分析してみますと、「自分がした行為の先の事、即ち、見えなくなった部分で、物がどうなったかを探ろうとする子」と「穴に物を入れるという単発的な行為だけをたのしんでいると思える子」がいたという発見でした。この両者の子ども達の比較を追ってみますと、見えなくなった部分を確かめようとする子は、皆一歳半を過ぎていて、他のあそび、例えば、同じ屏風のマジックテープはがしにしても、片っぱしから取っても又、元にくっつけておく。タンスの引き出しをあけて中から物を出しても又、入れてしめておく、などの行為が多く見られる点が共通していました。ところが、穴に

物を入れるだけの行為を楽しんでいた子ども達は、マジックテープをビリビリはがし取り、もう取るものがないと知ると他の所に移っていき、タンスや引き出しをあけ、中味をすっかり取り出してしまうとそれで満足といった状態でした。月齢的には、一歳七ヶ月児も一人いましたがあとは一歳半に達していない子ども達ばかりでした。

そこで、穴に落とした時、見えなくなった物がどうなるか？をもっと興味深く探っていける遊具を作り、子ども達の穴の探索の様子を追求してみたくなりました。それが㋒どこから出てくるか？の遊具です。



▲「どこから出てくるか？」の遊具

◇自己活動が拡大していく

いろんな穴から入れた玉の出口をつきとめる遊具ですが、この遊具に於ても、屏風の時と同様に、玉を穴に入れる興味だけで、自分が入れた玉が他の穴から出てくる事には殆ど気がつかない。というより、入れると手を叩いて喜び、又、他の玉を次々入れる行為の繰り返しを楽しむ子と、何回か玉を入れた後、コロッと穴から床に落ちる音をききつけて、入れた玉の出口をつきとめようとする子がいることがわかりました。

次の表2は、この遊具におけるT男個人の経過を追ってまとめたものです。生後10ヶ月～15ヶ月までは、穴に入れた玉がなくなると〃オヤッ〃と思って穴に手をつっ込んだり箱を叩いたりして玉を探そうとする行為はみられましたが、入れた玉がどこから出てくるか？　即、穴の入口と出口の関係まではつきとめられませんでした。

表2 「どこから出てくるのかな？」㋒の遊具におけるT男の経過

月　齢	特徴的な事柄	記　　録
10 か 月	穴に玉を入れる	・玉をAから入れ、落ちていくとニコッと笑い、又他の玉を入れ手を叩く。玉がBから出てくることには全く目を止めない。ひたすら玉を穴に入れては喜んでいる。
12 か 月	玉を見つめる ↓ 手をつっ込む	・Eの穴に顔を押しあて、Aから入れた玉が透明パイプをころがっていく様子をじっと見ている。時々Eに手をつっこみ玉を探す。
14 か 月	玉を探す	・穴に入れた玉が見えなくなると、箱を叩いたり、箱ごとひっくり返して、玉を探す。
15 か 月		・入れた玉がどこかでコロッと床におちる音をきき玉をさがしに音の方にいく。ころがっていく玉を追いかけていってつまみ、〝エッエッ〟と保育者に示す。が、どこから入れれば出てくるか、はつきとめるようすはなく、そばに玉がたくさんあるとまだ入れることに夢中である。
19 か 月	入れる ↓ 出てくる　をつきとめる (M－N)	・N側について、Mから入れた玉が目の前のNから出てくるのを認め、〝ター！〟と大きな声を出し、出てきたその玉をとって又Mから入れ、すぐNの方を見る。Mから入れるとき、もうすでにNの方を見て入れるようになる。1つの玉でM－Nの所だけで何度もくりかえし遊ぶ
22 か 月	入れる ↓ 出てくる　をつきとめる (A－B)	・Aから入れた玉が、Bから出てくるのを目で追えるようになり、喜んで知らせにくる。 〝ハヤーイ、シェンシェミテー、ココハヤーイ！〟
26 か 月	入れた玉を ↓ 取ろうとする 入れる→出るの予測ができると次の活動の目標がうまれる ↓ 失敗 試行錯誤 ①「他児を使う」	・Aから入れるとすぐBの方に移動して、その玉をひろい、又入れる。 次には、出口を指さして〝デター〟(出テクルヨ) と笑う ・Aから入れた玉を床にころがりおちる前に受けとめようと、箱の上にかぶさるように手をさし出すが何度やっても受け止められず、そばにいた友だちを呼んで〝○○チャン、ミテテー、コッカラ〟と他児をBの所にはりつけさせ、Aから入れるや〝トッテー〟と言う。友だちがBの所に手をあてて〝トッタ〟と言うと、2人でA－Bの通路を確かめ合うように〝ココ、デタネ〟と笑い合い、くり込し遊ぶ
27 か 月	②「物」を使う	・箱のくぼみにありったけの玉をのせ、間をおかずに、次々Aから玉を入れていく。Bから次々つづいて出てくるのをみとめ、近くにあった容器(ざる)を出口Bにおき、そこにAから入れた玉をうけとめる。ざるに玉がたまると、又くぼみに玉をあけ、何度もくり返し遊ぶ、〝イッパイ、入ッタデショ〟
翌　日	③自分の体を使う 足→手 自分の目標を達成する	・ D側から何度もAに入れてはすばやくBの方に移っていって、玉をうけとめようとするが、玉の方が早い。すると今度は、箱にまたがって、Aから入れ足で玉をうけとめる。〝トッター！〟と大喜びして玉をとり出し又Aに入れ……くり返すうちに上半身の体を大きく動かしAから入れると手でBをふさぎ〝トッタ〟と玉をかかげる。

このT男が19ヶ月の時Mから入れた玉が、目の前のNからさっととび出すのを知って、〃アッタ〃と喜び、又Mに入れすぐNを見て確かめていました。

22ヶ月の時は、Aから入れるとBから出るという関係をつきとめ、その後4ヶ月後には、D側にいて、Aから玉を入れるとすぐ出口Bの方に玉をひろいに行きました。どうやら、出口からとび出す前に玉を取ろうとしている様子です。しかし玉の方が早くて簡単には取れそうもないことがわかると表のように友だちを出口にはりつけさせたり、容器を出口において玉をうけとめ……その翌日には、箱に股がって玉を入れると出口のパイプに自分の足をつっこんで取る、などT男なりに工夫をし、最終的には自分の手で入れた玉を上手にうけとめる事が出来ました。こうして二ヶ月近いT君のこの遊具での目標〃自分で入れた玉を出口で取ってやろう〃を達したわけです。

他の子に於ても、あそび方やこの遊具に費す時間的経過の差はありましたが、入口—出口の関係をつきとめると、今度は出てくる前に取ってやろうといどんでいく過程は同じ様でした。そこで、この遊具を、もっと大きな全身運動を伴ったものにしたい。そうすればそこにもっと、挑戦していこうとするやや試行錯誤が育つのではないかと考え試作したものが、ボールであそぶ遊具や「どこから出てくるか？」の遊具（写真）でした。

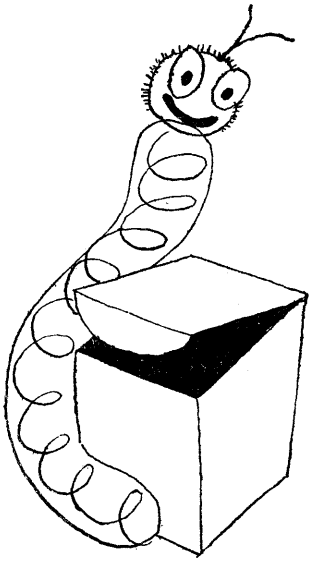
まとめと今後の課題

(1)表1でわかるように三歳未満児の興味ある活動や遊具の大半が穴への興味と結びついているものである事。

(2)幼い子ども達の興味深い探索行為の対象物の一つである穴、この穴の果たしている役割は、「見える部分と見えない部分の関係を子ども達につきとめさせながら、見えない部分についても、そこに何があるのか？そこで何が起きているか？　を探らせている物である事。周囲とかかわりながら、自分というものを知り、とらえていく探索行為の過程に於て、自分という存在の他にも目に見えない世界があることを知り始めた子

ども達。繰り返し穴に働きかけていくことでその見えない世界――以前はこうだったという過去の世界――きっとこうなる筈だといった予想が出てくる世界――に突入しながら、自己活動を押し広げていっているのだと思えてなりません。

保育者が試作した様々な遊具であそびながら、ほぼ、一歳半位を境に、見えない部分にも予想をたてて探る行為がみられるようになってきたこと。予想がたつようになることで、それをぜひ確かめようとする意欲が生じ、予想が自らの行動のめあてになり、自己活動をうみ出していくエネルギー源になっていること、即ち、子どもたちは、個々に探索をくり返しながら、試行錯誤をくりかえし、自分の活動を自らの力で広げていけることが穴を通してわかってきました。

三歳未満児にとって穴のような興味深い対象物、他に何があるでしょうか？　そういう対象物には、子ども自らが働きかけていき、その物に触れながら、やがては、自分がそのものの主人になっていけるような活動の変化、自己活動の変化の過程が必ずみられる筈だと確信し、三歳未満児の探索活動を今後も追求していきたいと考えています。

（川崎市立三田保育園）